滝澤学君の卒論『写真論－「撮る」ことから写真を眺めて』を優秀卒論に推薦します。

『写真論－「撮る」ことから写真を眺めて』は、筆者が日常の中で見返したアルバム、その中で展開される幾多の幸福な家族像に対して、こみ上げてくる度し難い、えもいわれぬ嫌悪感が原資となって展開される論文である。なぜわたしは家族の幸せそうな写真群に、眼を背けたくなるのか。子としてのわたしと、それを「温かく眼差す」両親の風景を想像し、本来、「あるべき」家族像を演じるアルバムのストーリーを裏切って、そこに嫌悪＝死を見通さざるをえない「わたし」との対話が展開される。具体的な議論は、まず現実と記憶の関係を整理するため、岡真理の「作られた記憶症候群」を再考し、現実を物語の外部に求めるのではなく、フロイト以降の精神分析者のように、心的作用の結果としてとらえ直すことから始まった。つぎに視覚文化論的写真論、つまり撮られた写真と鑑賞者との間で行われる応答を議論の中心に据えて、「写真とは何か」という哲学的な問いを展開する議論のあり方に疑問を呈し、検討を加える。写真についての議論が、これまで鑑賞者の眼差しの政治性や、科学の眼差しによる「分析」に集中してきたこと、そしてそれによって分析が、作品や作者を超えたところで議論され、テクストとしての写真論が展開されてきた。このように視覚文化論的写真論は、テクスト(写真)のマテリアルな側面(シニフィアン)を指標として分析が展開されるが、このような議論はすでに筆者の関心ではない。問題は、「写真とは何か」という表象システムの本質を知ることではなく、「人はなぜ写真を撮るのか」にある。そして最後に、バルトの『明るい部屋』を批判的に論評した、ティスロンの『明るい部屋の謎』に至り、筆者は一応の答えを導き出すことに成功している。ティスロンは自らの「行為の写真論」に基づいて、母の死による苦しみを一般化されたくないというバルトの意識の板挟みが、写真を苦痛なものとしてとらえる要因となったと指摘する。ティスロンにとって写真とは、心的加工によって象徴化されない不安と格闘する手段として存在する。よって家族写真で筆者が感じた嫌悪は、親が私を家族として所有したいという欲望に対す嫌悪であり、また親は欲望を持っていたのではなく、象徴化できない出来事に対する不安を抱いていたのである。さらに私たちは写真を眺めることで、自らの心的現実と現実的現実とのずれを知り、自身の物語＝現実を知るのである。

滝澤君には当初、写真というテーマに従って、ベンヤミン、多木浩二、ソンタグなど視覚文化論者の文献を薦めた。それらの議論をまねて卒論をものすればいいと考えていた。しかし結果として出てきたものは、難解なバルトとティスロンの議論の解釈をめぐるものであり、いい意味で、わたしの「期待」をまったく裏切るものであった。まず問題設定を行う。そして問題に対して一つづつ文献を当たりながら、各文献のエッセンスと自分の疑問とをすり合わせていく。さらに文献を渉猟し、ついに一応の解答を得る。その過程で、頭や心の奥底に溜まっているモノを言葉に換えていく作業をコツコツと果たしていく。この実践の積み重ねによって、論文を完成させる。こうした一連の作業を、滝澤君の卒論では見事に実践されている。なかでも心的状況を反映する言葉を、苦しみながら紡ぎ出していく作業には感銘を受けた。ただでさえ難解な記号文化論にも飽き足らず、より心地よい解を求めてバルト最晩年の著作を読み通し、ディスクールの制度を超えたところに自らの居場所を求めた。その意味で、滝澤君の卒論は十分に優秀卒論としての要件を満たしているものと判断し、ここに推薦する次第であります。